
論説

日本語およびアジア言語における「南北方言境界線」から見たインド・ヨーロッパ語族二大分派 Centum-Satem の境界線

安部 清 哉

【要 旨】

日本語の方言分布に見出した「南北方言境界線」は、日本列島における南北での気候の相違を主要な要因として形成されたものであった(安部 1999)。同様に、気候の南北差と一致する方言境界線は、中国語にも、朝鮮語にも存在していた。これら3つの言語の南北方言境界線をつなぐと、ほぼ同じ緯度的位置において東西に横につながっているひと続きの境界線となり、相互に関連性があることがわかる。アジアの3言語には、南北を2分する、連続する一つの方言(言語)境界線が存在していると解釈される(「モンスーン・アジア南北方言境界線」)。

気候の相違(最寒月期1月の平均気温0度等温線に代表させられる)が、言語(方言)の相違に影響するなら、同様の理由により、ヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語族(IE語族)の方言(語派)の境界線と気候の境界線も、同じ位置に存在するであろうことが推定された。

本稿では、東アジアの南北方言境界線、気候境界線、および、文化人類学的諸特徴の境界線が、日本語、朝鮮語、中国語で一致していることを、それらの基礎的データである個々の分布地図も含めて改めて提示する。新たに、同じ現象が、ヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語族の2大分派 Centum-Satem にも見られることを、世界で初めて指摘する。さらに、それら東洋と西洋の2つの地域における南北(東西)の方言において、同じ音韻対応[k-p (kw)]の現象があることを指摘する。

これらの一致を示すことによって、東アジアの言語・文化と、ヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語族およびヨーロッパ文化の比較言語・比較文化論的研究の必要性を主張するものである。

(2)

1 はじめに——東アジア言語文化研究からヨーロッパ言語文化研究へのアプローチ

東アジア諸言語の言語史研究を学際的に推し進めることによって、ヨーロッパの言語研究に新しい視点からアプローチする道がある。

本稿では、日本語の方言の研究から見出した、東アジアの言語境界線と文化境界線を紹介し、さらに、それらの研究から見出された、ヨーロッパにおける言語境界線ならびに文化境界線と、東アジアの言語・文化境界線との共通点について、報告する。本稿で取り上げるその共通点（図 20 と図 21 とを比較参照）は、管見の限りでは、世界で初めての指摘になる。

2 アウトライン——行論の概要

はじめに、本節では、本稿での行論の概略を、箇条書きに示しておきたい。

日本語の方言境界線の 1 つとして、日本語方言を南北にわかつ「南北方言境界線」がある（◆図 1, 安部 1999）。

その境界線の主要な形成要因は、その位置で南北に大きな相違を見せている気温・降水量など、総合的な意味での「気候」の相違である（安部 1999）。

気候が要因であるゆえに、ほぼ同じ位置に、民俗・生物・自然地理などを広く含む広義での「文化境界線」も同時に存在している（安部 2006.3 『学習院大学文学部研究年報』52）。つまり、◆図 1 の境界線は、文化人類学的な意味で、日本の「言語・文化境界線」でもある。

日本列島に、気候を背景とした方言境界線があるなら、同じように気候の南北の相違が存在している東アジア、つまり中国大陸の中国語の方言、朝鮮半島の朝鮮語にも、同じ地理的位置に、同様の南北方言境界線と、気

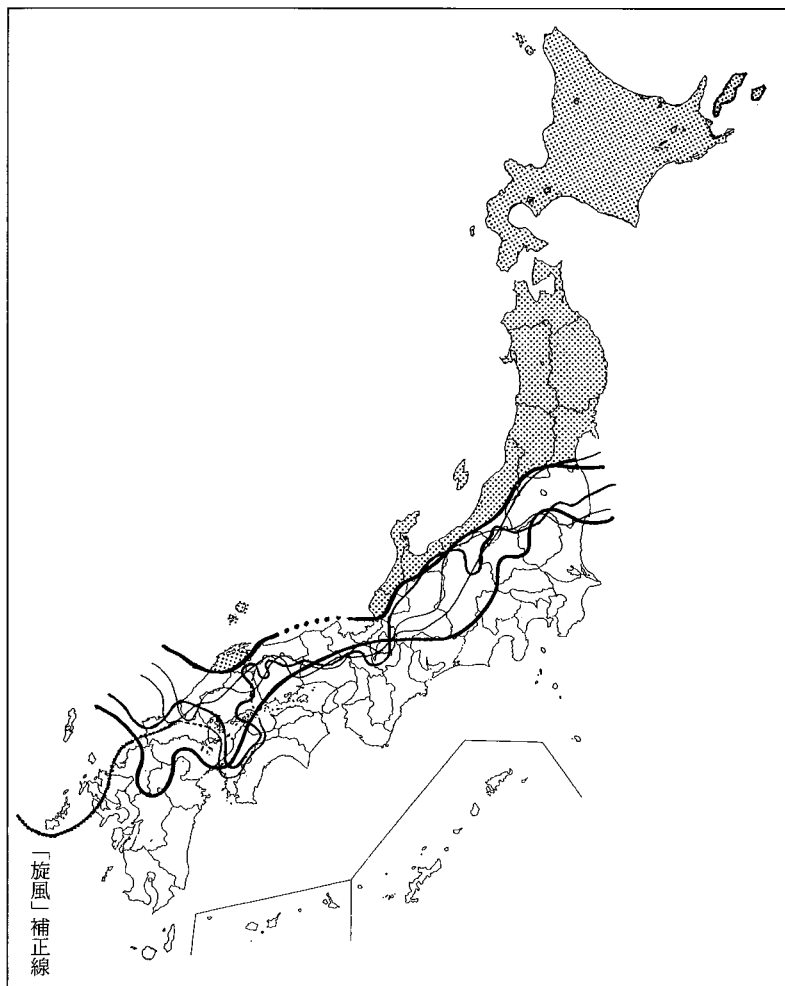


図1-① 日本語方言の南北方言境界帯（安部（1999）に「旋風」の線を補正）
 候上の境界線，文化人類学的境界線があることが，おのずと推定されてくる。

果たして，中国語，朝鮮語にも，ほぼ同様の位置に，それらの南北境界線が確認できた。

(4)

それら日本語、朝鮮語、中国語における、東西ほぼ一つながりに連続する南北方言をわかつ方言境界線には、気候条件における南北での相違という共通した形成要因があると解釈される。その目安となる気候条件の相違は、冬期最寒月期（主に1月）における平均気温氷点下0度線の位置である（そのほか降水量、降雪量など、生活や農耕に必要な「水」に関する条件も、ほぼ同じ位置において顕著な格差を示す）。その気候条件の相違と影響力を、簡略に表現すれば、「冬期に、氷点下0度を下回って、水や、植物などの重要な食料が、氷結するか氷結を免れるか否か、相対的に寒冷地か温暖地かという相違」と理解することができる。

東アジアの3言語——日本語、朝鮮語、中国語——において、気候の相違という共通の要因によって南北に分断される方言境界線が存在するならば、同じ気候の相違が存在する語族・言語の地域、例えば、インド・ヨーロッパ語族の地域においても、類似する言語境界線・方言境界線が存在している蓋然性が極めて高いと推定された。それゆえ、次に、地球上の他の地域における類似する方言境界線を探索することが課題となった。

インド・ヨーロッパ語族には、すでに明らかにされているように、古い段階での二分派として、Centum-Satem という語派（方言）境界線が存在している。Centum-Satem の境界線はヨーロッパ言語を南北（東西とも見えるが）に二分しているところからみて、東アジアの南北方言境界線と同様に、その地理的境界の位置に、同様の気候的相違が存在すると推定することができる。

果たして、Centum-Satem の境界線と極めて近似する地理的位置に、冬期最寒冷期1月の平均気温摂氏0度線が併走していることを確認できた（両者の線が大きくずれるのは、概略、歴史的経緯をもつ次の3言語のみと言える。すなわち、スウェーデン語、バルト語派、ルーマニア語である）。

さらに、この境界線付近（Centum-Satem 境界線および摂氏0度線）には、東アジアの南北方言境界線の場合と同様に、文化人類学的境界線も

確認できる。

これらによって、日本語方言における南北方言境界線の形成要因から推定した共通する現象は、中国語、ついで、朝鮮語、ついで、インド・ヨーロッパ語族においても、まったく同様に確認できることが明らかになった。

これらの一致は偶然のものではないであろうから、これらによって、東アジア言語の方言境界線、気候境界線、文化人類学的境界線が、共通の形成要因、つまり、気候条件の相違に直接ないし間接に影響を受けることによって生み出されたものである、と考えるのが、現段階では、もっとも妥当性が高いと解釈されることになる。

さて、これらの同一性から推定して、東洋と西洋それぞれの言語の文法・音声・語彙いずれかの個々の現象においても、同じような南北での相違が現れている蓋然性が高いと推定される。東アジアの3言語において、共通する南北の音韻対応があるなら、同じ現象は、Centum-Satemにも見られる可能性が高い。また、反対に、Centum-Satemに見られる言語現象は、同様に、東アジア言語の南北方言間にも、現れてもおかしくない、ということが推定可能になる。

それらのことから考えて、今後は、東アジア3言語の方言と、Centum-Satemの対照研究・比較研究が、世界的言語研究としても極めて重要な意味を持つことが指摘できる。

たとえば、その1例として、日本語における「2つのカ行音」「2つのサ行音」「アメーサメ交替」の問題を指摘できる。

このように、これら東洋・西洋の2地域の言語の比較地理言語学的研究は、新たな研究の可能性を拓くものである。その契機となった日本語方言の地理言語学的研究は、言語史研究に貢献できる視点を持っている。

3 日本語方言における南北方言境界線

日本語の方言境界線の1つとして、◆図1に示したような位置に、日本語方言を南北にわかつ「南北方言境界線」がある(図1参照、図中の5本の方言境界線については安部 1999 参照)。

その後の安部の研究によって(安部(2013), 安部「表日本方言」原稿提出済み『方言学辞典』, 未刊行, 朝倉書店), 現在, 日本語方言における南北方言境界線をもつ方言現象としては, ◆図1中の5本の方言境界を含め, 次の諸事象を挙げるができる(LAJは『日本言語地図』の略称)。(なお, 以下の個々の言語分布地図の掲載は別稿を予定している。)

◇語彙(特に寒冷気候に関わる傾向が強い)

- ①▲シモヤケ(LAJ 127 図「しもやけ(凍傷)」(柴田武 1963)
- ②▲無回答・タツマキ(LAJ 264 図「つむじ風」(真田信治 1979)
- ③▲ノリツケホーサー・ノリツケホーソー(LAJ 298・299 図「梟の鳴き声」(佐藤亮一 1986)
- ④▲シミル(LAJ 97 図「(手拭いが)凍る」(加藤正信 1995)
- ⑤▲「シバレル(凍)」(『日本方言大辞典』での使用地域による)
- ⑥▲「フキ(吹雪)」(『日本方言大辞典』での使用地域による)
- ⑦▲「シガ・スガ(氷・氷柱)」(『日本言語地図』「氷」「氷柱(つらら)」による)
- ⑧▲風向名「アユの風」(室山敏昭 2001 他)
- ⑨▲地名「溜池を表す『～堤』」(鏡味明克 1984)
- ⑩▲地名「アラマチ(荒町)」(<新町)
- ⑪▲▼えらび歌の歌詞「神様一天の神様」(石井聖乃 2003「えらび歌の地域差に関する調査研究」)

◇音声(唇音化, 口蓋化, 喉頭化に関わる傾向があるか?)

- ⑫▲▼「ボウ(追う)」(LAJ 147・189)(唇音 bu-母音 o)(唇音化)

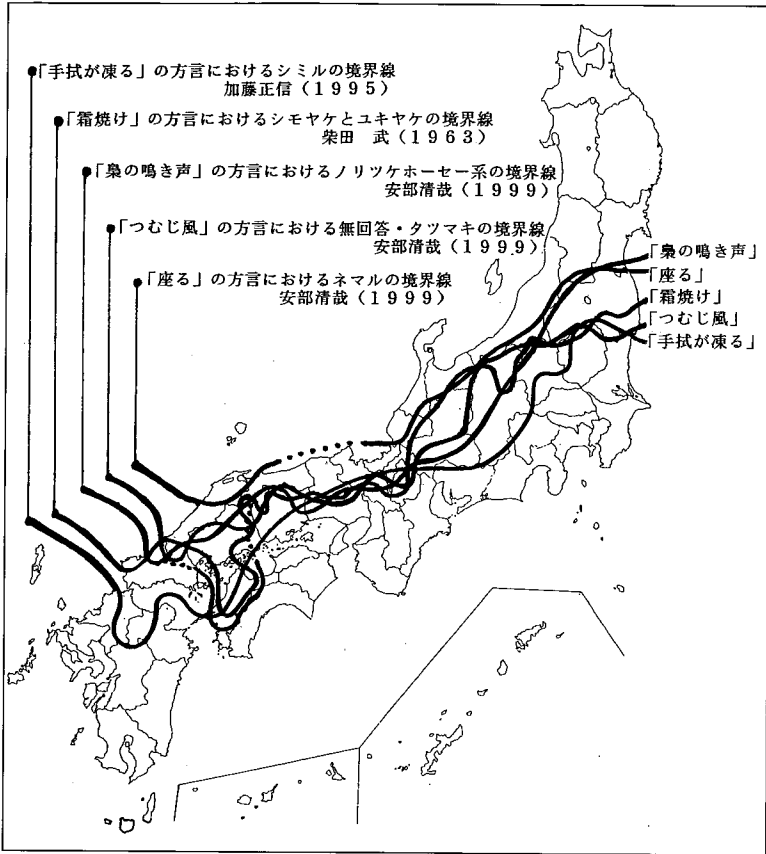


図1-② 日本語方言の南北方言境界線 5本統合図(安部 1999)

- ⑬▲▼地名分布「bu-u 対応 (Budo 葡萄-udo・uto 宇藤・宇都)」
(唇音 bu-母音 u) (唇音化)
- ⑭▲▼「キツーヒツ (櫃)」の「*kw-p 対応」(唇音化, 喉頭化)
- ⑮▲▼「『酸っぱい』のスカイースパイ」の「*kw-p 対応」
(LAJ 41 図) (唇音化, 喉頭化)
- ⑯▲▼「かかと (踵) のアクド対ア (フ ド)」の「*kw-p 対応」
(LAJ ■●図) (唇音化, 喉頭化)

(8)

⑰▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化（ヒェ・ヘ）」の分布（口蓋化）（『日本方言音韻総覧』）

⑱▲▼「u<i（フガシ（東）・フゲ（髭）」の分布（LAJ 11・12）鏡味明克 1984（iの口蓋化）

⑲▲▼「四つ仮名」における「一つ仮名地域／zi／」とそれ以外の地域（iの口蓋化）

⑳▲▼「アクセントが母音の広狭により変化する地域▲&変化しない地域▼」（唇音性？）

（*「語中語尾のカ行音・タ行音の有声化」（大辞林）を挙げることがあるが南での分布があるので保留する）。

◇文法（北での「aru型動詞」の残存，および，南での開音節語幹動詞の残存）

㉑▲「ネマル」の分布（LAJ「座る」「あぐら（胡座）をかく」）

㉒▲「オガル（生育）」の分布（<生ふ）（『日本方言大辞典』での使用地域による）

㉓▲地名分布「カクマ」（かくまる（囲））（<囲む）

㉔▼「下二段（語幹開音節）動詞の優勢残存」（平山輝男 1984）

その境界線の形成要因としては，その位置で南北に大きな相違を見せている気温・降水量など，総合的な意味での「気候」の相違の影響が最も大きいと考えられる（安部 1999）。

気候が要因であるゆえに，ほぼ同じ位置に，民俗・生物・自然地理などを広く含む広義での「文化境界線」も同時に存在している（安部 2006. 3）。

つまり，◆図1の境界線は，文化人類学的な意味で，日本の「言語・文化境界線」と言えるものである。

4 中国大陸における南北方言境界線——「秦嶺（山脈）—淮河—境界線」——

日本列島に、気候を背景とした方言境界線があるなら、同じように気候の南北の相違が存在している東アジアの大陸部、つまり中国大陸側の言語である中国語の方言にも、同じ地理的位置に、同様の南北方言境界線があることが、おのずと推定されてくる。

果たして、中国語にも、ほぼ同じ位置に、かつての古い中国語方言の南北境界線の痕跡を見出すことができた。それは、最も典型的なものとしては、次の2組の「河川名」(◆図2, ◆図3)における南北方言に投影している方言境界線である。

まず◆図2は、中国大陸における河川名「溪」(南側)と「溝」(北側)の分布とその境界線である(陳正祥(1980)『中国地理図集』,「図129 中国「溪」・「溝」地名的南北対立」より)。数地点の例外はあるものの、黄河と揚子江の間、ほぼ淮河に沿った位置に、これらの河川名の境界線があることがわかる。

◆図3は、中国大陸におけるもう一つの有名な河川名(大河名)である「江」(南側・揚子江など)と「河」(北側・黄河など)の分布とその境界線である。代表的な河川、揚子江と黄河にもあわれている南北での名称の相違である。(◆図3の初出は、鈴木秀夫(1978)『気候と文明』「中国における河の名の分布」、いま、橋本萬太郎(1981)より転載する。なお、図3では沿海州にも境界線がある点で◆図2の境界線と異なるが、その分布については、安部(2006.3)を参照。)

中国語方言に見られる南北方言境界線の位置にも、日本の場合と同様に、気候上の境界、および、文化的境界を見出すことができる。その文化的な境界線は、中国では南北文化をわかっ境界線として、すでにかなり古くから知られている、後に「秦嶺—淮河—(境界)線」と呼ばれる著名な文化

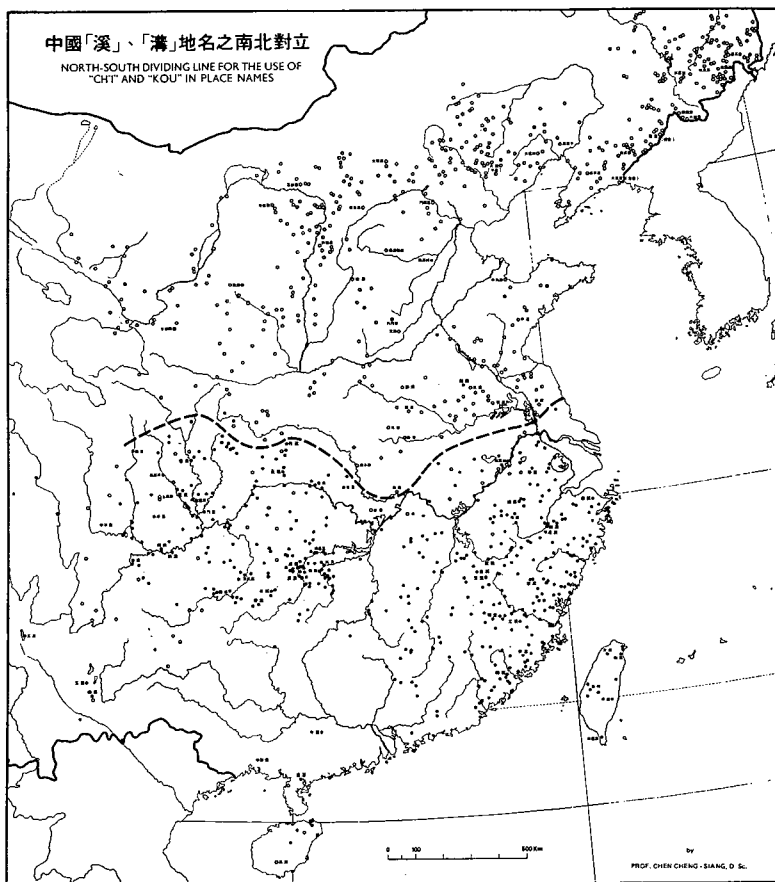


圖129 中國「溪」、「溝」地名的南北對立

図2 中国の河川名の南北分布1——「溪」(南)と「溝」(北)——(陳正祥(1980)「中国「溪」・「溝」地名的南北対立」『中国地理図集』)

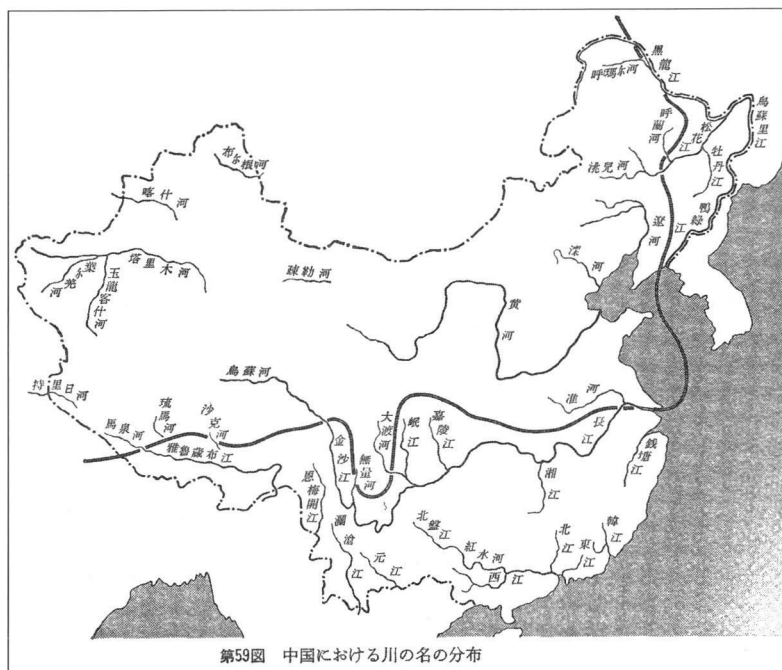


図3 中国の河川名の南北分布2——「江」(南)と「河」(北)
 ——(鈴木秀夫(1978)「中国における河の名の分布」
 『気候と文明』)(橋本萬太郎(1981)より転載)

境界線に相当するものであった(安部 2007. 3d)。

「秦嶺・淮河線」は、「年間降水量 1000 mm の等量線」が、その 1 つの基準となっている境界線であるが、「最寒月期 1 月の平均気温摂氏 0 度等温線」もいま 1 つの重要な目印と言える。

また、先の河川名 2 組に加えて、さらに、東アジア(中国大陸)における「動物地理区画」としての「古北界」(北側)と「東洋界」(南側)の境界線も、ほぼ同様の地理的位置に横たわっていることを、安部(2001. 11)では指摘しておいた。この古北界と東洋界の動物の系統上の分化は、「中国第四紀動物区系演変示意图」(◆図 7, 『中国自然地理図集』1984 より)

(12)

に示すように、第四紀更新世以降の系統的分化であることがわかっている。

「中国「溪」・「溝」地名的南北対立」(◆図2)

「中国における河の名の分布」(「河」と「江」)(◆図3)

「年間降水量 1000 mm の等量線」(◆図4)

「最寒月期 1 月の 0 度等温線」(◆図5)

「動物地理区画」における「古北界」と「東洋界」の境界線 (◆図6)

(『中国自然地理図集』1984 より)

これら 5 本の文化境界線を 1 つの図中に記載したのが、◆図8である(安部清哉 (2007. 3d))。安部清哉 (2007. 3d) では、それらの統合図のもととした上記の 5 つの個々の地図およびその出典については、紙幅の都合で掲載を割愛していたので、ここに 5 図を個別に掲載しておくことにした。なお、境界線の統合においては、5 つの図を同縮尺に合わせて、当該分布境界線を 1 枚の地図上にトレースしたもの (◆図8) である。◆図8の境界線の統合図を、境界線と国境線と三大河川のみにして見やすく示したものが◆図20である。

これら言語 (方言)、自然現象、生物分布には相関性があることは明瞭であろう。これらの総合的境界線の地理的位置は、中国では、漢代から知られている(陳正祥)文化境界線で、後の時代になって「秦嶺・淮河線」と名付けられた文化境界線ということになる。等温線、降水量線以外に、これらの境界線の重なりを具体的に指摘し図示した研究は、その後調査しても、管見の限り中国でも見られないようである。安部のこの図が世界で最初のものと思われる。

この「秦嶺・淮河線」は、東にそれを延長していくと、見事に、日本列島上の「南北方言境界線」に連続していることを見てとることができる(◆図8参照)。この重なりを指摘も、管見の限りでは、安部の研究が最初のものと思われる。

◆図8の統合図の資料としたのが、◆図4と◆図5であるが、参考まで

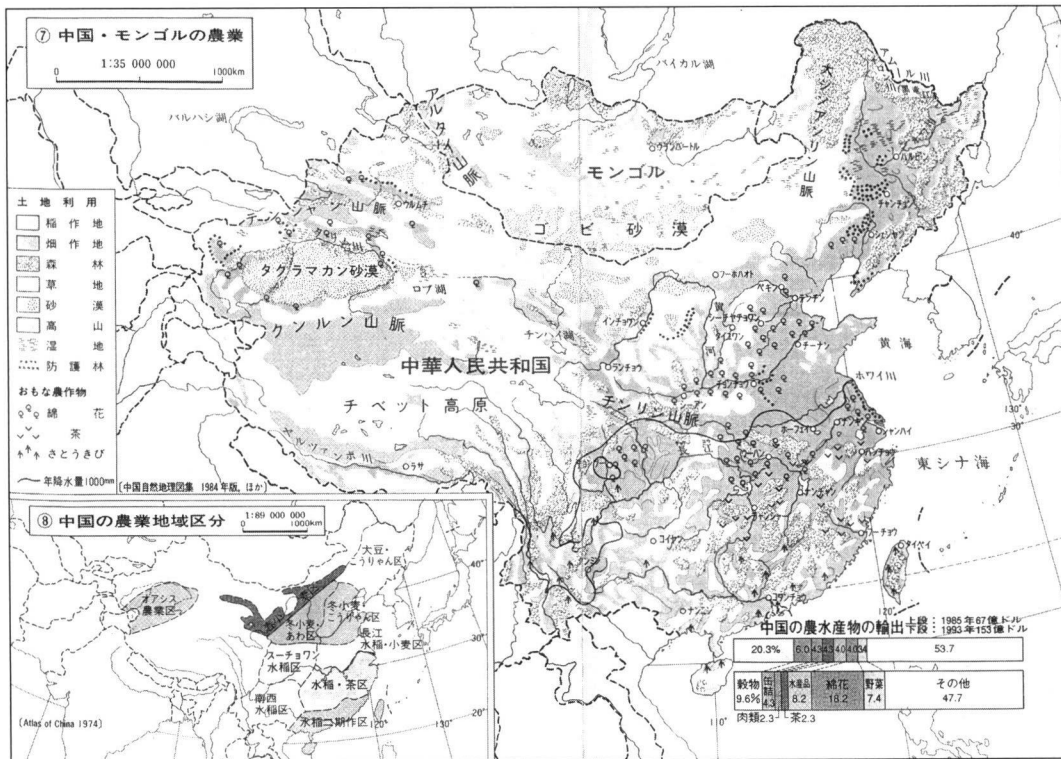


図4 年間等降水量の1000mm線(帝国書院編集部(1997)『新詳高等地図 最新版』帝国書院)

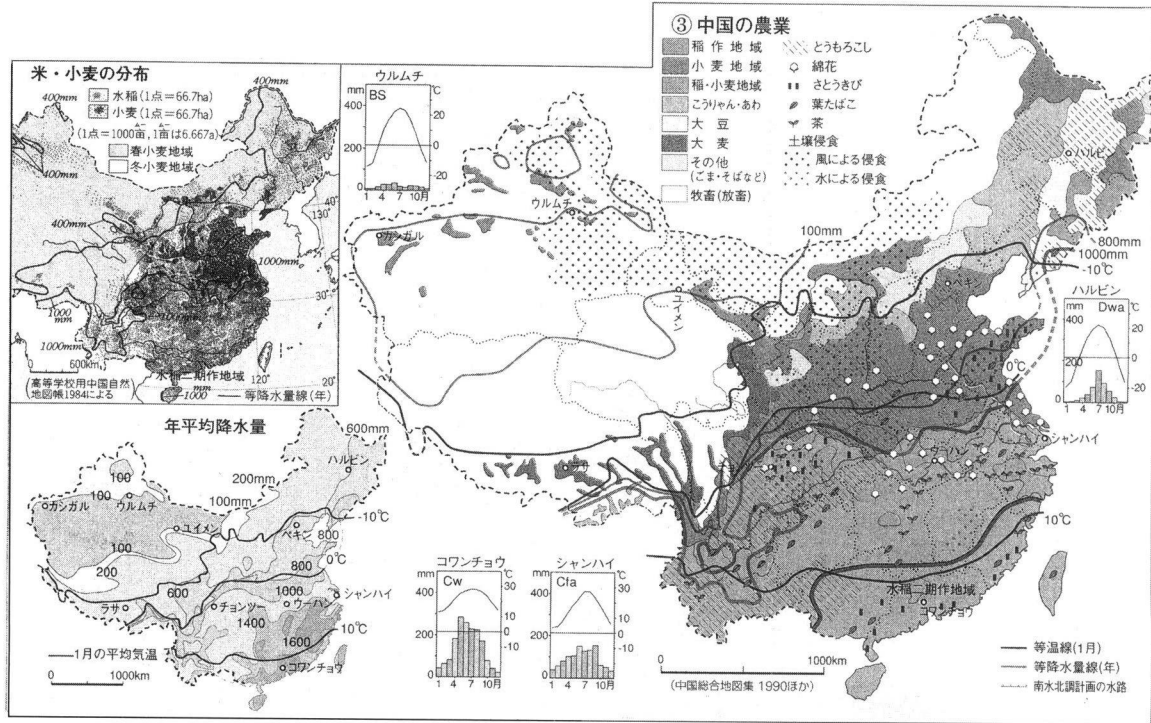


図5 最寒冷期1月の摂氏0度等温線

(二宮書店編集部(2000)『新詳現代地図』二宮書店)(年間等降水量1000mm線も記載がある)

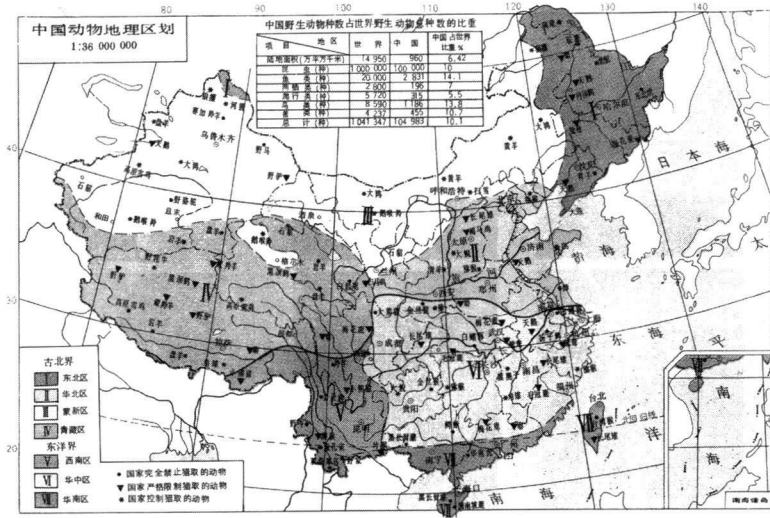


図6 「動物地理区画」における「古北界」と「東洋界」の境界線
 (『中国自然地理図集』1984)

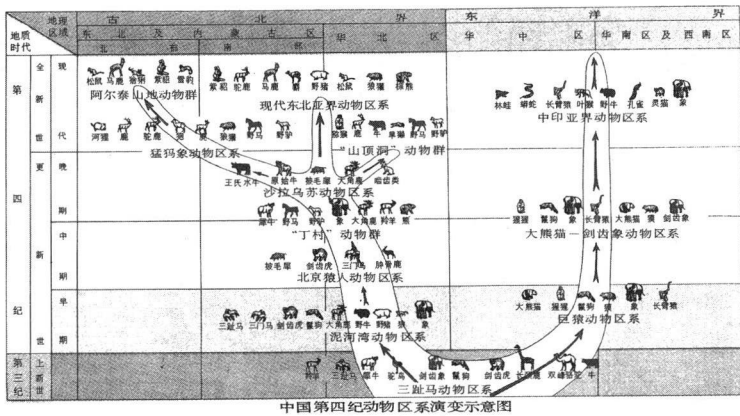
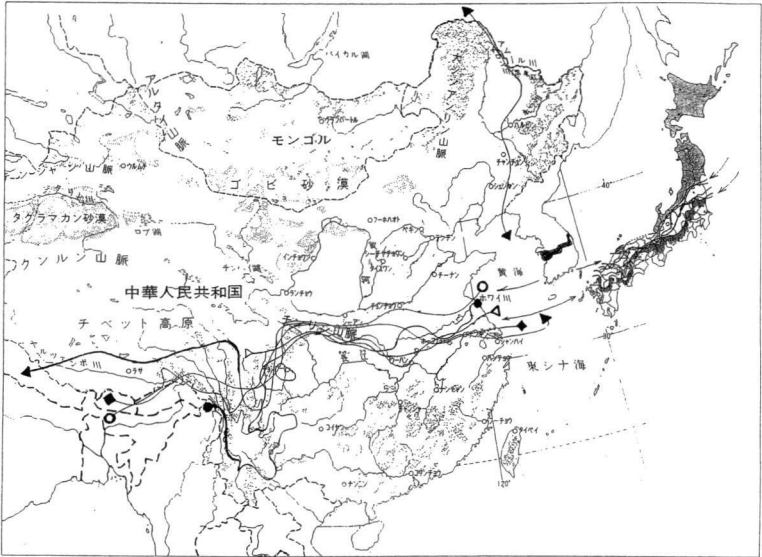


図7 中国大陸における第四紀動物区の系統変遷図 (『中国第四紀動物区系演变示意图』『中国自然地理図集』1984)



中国「北—南」境界 ▲河—江 △溝—溪 ◆動物区画線（古北界—東洋界）○摂氏0度等温線（最寒月1月）
●1000mm/年間等降水量線（所謂「秦嶺山脈—淮河—境界線」に相当）【日本・朝鮮半島は、南北方言境界線】

図8 モンスーン・アジア中央気候境界線（安部清哉（2007. 3d）
（上掲の図2～6の境界線を，等縮尺図上に総合した図）

◆図9を掲示しておく。また，文化的境界線としての一資料として◆図10の「中国の農業の主要境界線」も提示しておくことにする。

（なお，昨今では「秦嶺—淮河—（境界）線」はWikipediaにも立項されている。以下に参考までその記述を転載する。年間降水量として2つの数字=1000mmと800mm=が記載されているが，通常は1000mm線が取り上げられる。）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%A6%E5%B6%BA%E3%83%BB%E6%B7%AE%E6%B2%B3%E7%B7%9A>

「秦嶺・淮河線（しんれい・わいがせん）は中国東部における年間降水量1000mmのラインのことである。秦嶺・淮河ライン，チンリン・ホワイ線ともいう。ちょうど年間降水量1000mmの等量線が秦嶺山脈と淮河を結ぶ線と一致するこ

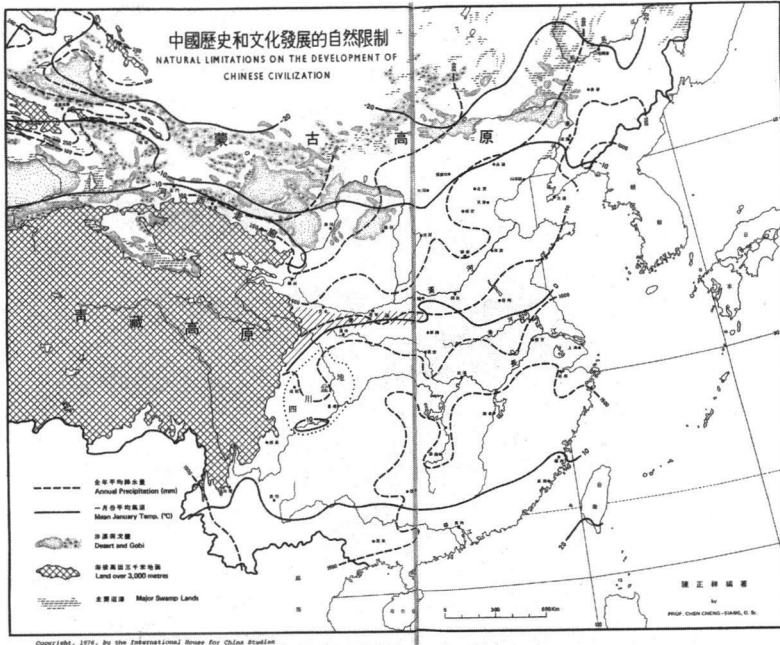


図9 中国における0度等温線・1000 mm等降水量線
 (陳正祥 (1980)「中国歴史和文化發展的自然限制」『中国地理図集』香港・天地圖書有限公司)

とからこの名前で呼ばれ、一般的にこの線より以北が小麦地帯，以南が稲作地帯とされている。耕作穀物の違いが，食文化の違いも産んでおり，この線の北側が麵食・パン食，南側が米食という主食を分ける大まかな線と考えることもできる。中国では秦嶺・淮河線が800 mm等降水量線であり，1月の0度等温線である。伝統上これを境に，「南北」が別れる。気候が大きく異なると共に農業生産や生活習慣が大きく異なる。(中略) 農業生産や生活習慣の特徴——北は水が少なく，小麦などが主食となるが，南では水稲がメインとなる。昔の交通手段も北は馬が中心であるが南は船が中心となる。まさに「北麦南稻，南船北馬」と言われる如くである。中国の南北を代表するように，それぞれ黄河・長江という大河が流れている。「北方」と「南方」とでは，同じ漢民族でも言語も違うし，体質も違うと言われている。」

(上記 Wikipedia より)

5 朝鮮半島（朝鮮語・韓国語）における南北方言境界線

日本語と中国語において、同じ地理的位置に、形成要因を同じくする方言境界線が存在するならば、朝鮮半島の朝鮮語においても、同じ地理的位置にあたる、それら2つの境界線の延長線上の間に、同様にして、朝鮮語の方言境界線と、気候・文化境界線があるであろうことが、おのずと推定可能となる。

果たせるかな、朝鮮語にも、同様の地理的位置に、南北方言をわかつ主要な方言境界線が確認できる（◆図11-①～④参照）。

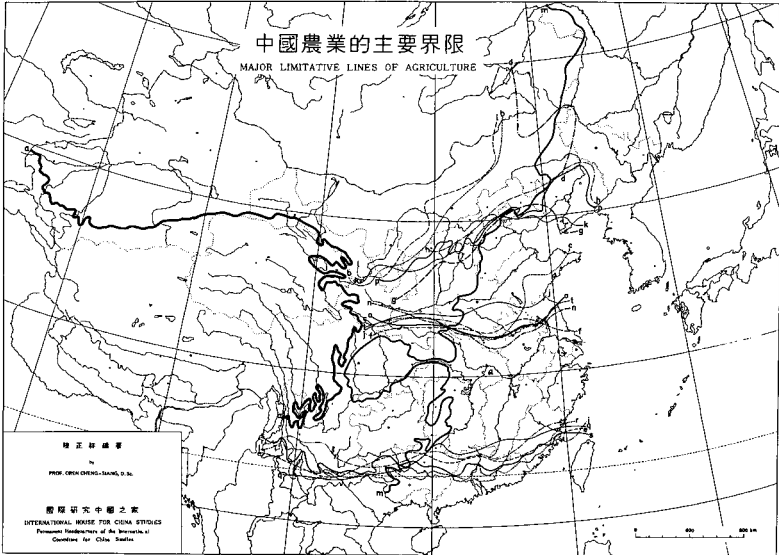
その位置は、日本および中国と同じように、気候・文化境界でもあった（気候については、◆図12参照）。

◆図8に示してあるように、朝鮮語方言における南北の方言境界線の地理的位置が、日本語および中国語の南北方言境界線を結ぶ線上よりも、若干緯度が高いのは、半島部に流れ込む暖流の影響に拠るものと推定される。

これら日本語、朝鮮語、中国語において、東西ほぼ一つながりに連続する南北方言をわかつ方言境界線には、気候条件における南北での相違という共通した形成要因があると解釈される。その目安となる気候条件の相違は、前章の「秦嶺・淮河線」でも言及したように、「冬期最寒月期（主に1月）における平均気温0度線」の位置である（そのほか降水量、降雪量など、生活や農耕に必要な「水」に関する条件も、ほぼ同じ位置において顕著な格差を示す）。

その気候条件の相違と影響力を、簡略に表現すれば、「冬期に、氷点下0度を下回って、水や、植物などの重要な食料が、氷結するか氷結を免れるか否か、相対的に寒冷地か温暖地かという相違」と理解することができる。

さて、東アジアの3言語——日本語、朝鮮語、中国語——において、気候の相違という共通の要因の影響を蒙って、南北に分断される方言境界線



中國農業的主要界限

1. 主要自然界限

- a. 青藏大高原邊緣線，亦即海拔3,000米等高線。
- b. 半乾旱區和乾旱區的分界，亦即乾燥指數2的等值線。
- c. 潤濕區和半潤濕區的分界，亦即乾燥指數1的等值線。
- d. 半乾旱區和半潤濕區的分界，亦即乾燥指數1.5的等值線。
- e. 日平均氣溫等於或大於10℃全年積溫6,000℃的等溫線。
- f. 日平均氣溫等於或大於10℃全年積溫4,500℃的等溫線。
- g. 日平均氣溫等於或大於10℃全年積溫3,500℃的等溫線。
- h. 日平均氣溫等於或大於10℃全年積溫3,000℃的等溫線。
- i. 最冷月平均氣溫10℃的等溫線。
- j. 最冷月平均氣溫0℃的等溫線。
- k. 最冷月平均氣溫-6℃的等溫線。

- l. 年平均降水量250毫米的等降水線。
- m. 東部地區500米的等高線。
- n. 夏綠林和常綠林的分界。

2. 主要經濟界限

- o. 水稻普遍栽培地區北界。
- p. 冬小麥普通栽培地區北界（兩年三熟區的北限）。
- q. 水稻兩造連作地區的北界。
- r. 主要熱帶水果和膠樹木分佈的北界。
- s. 一年三熟區的北限。
- t. 一年兩熟區的北限。

圖 10 中国的農業の主要境界線（「秦嶺—淮河線」での境界線の東がある。南方の東は南回帰線での境界線）（陳正祥（1980）「中國農業的主要界限」『中国地理図集』香港・天地図書有限公司）

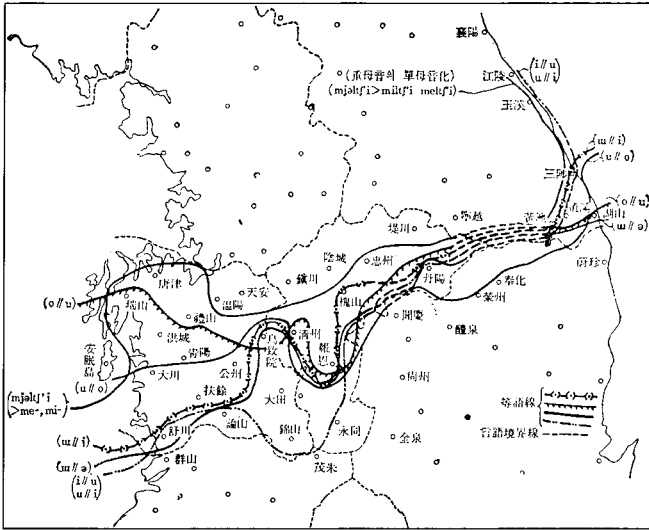


図 11-① 朝鮮語の南北方言の境界線「母音対応」
 (韓国方言学会 (1973) 『国語方言学』)

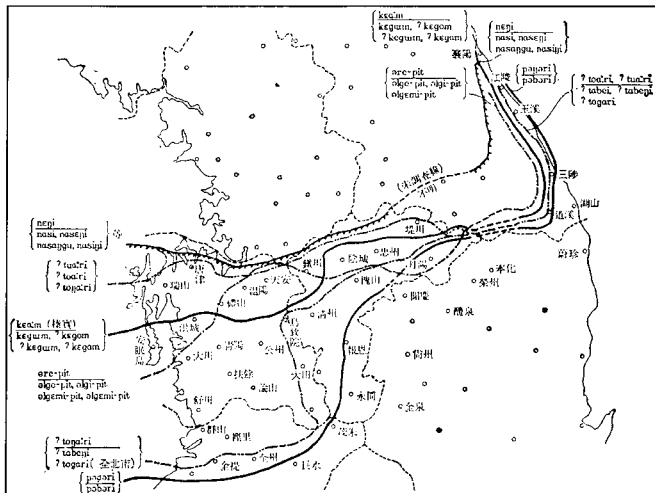


図 11-② 朝鮮語の南北方言の境界線「中間子音 (維持脱落)」
 (韓国方言学会 (1973) 『国語方言学』)

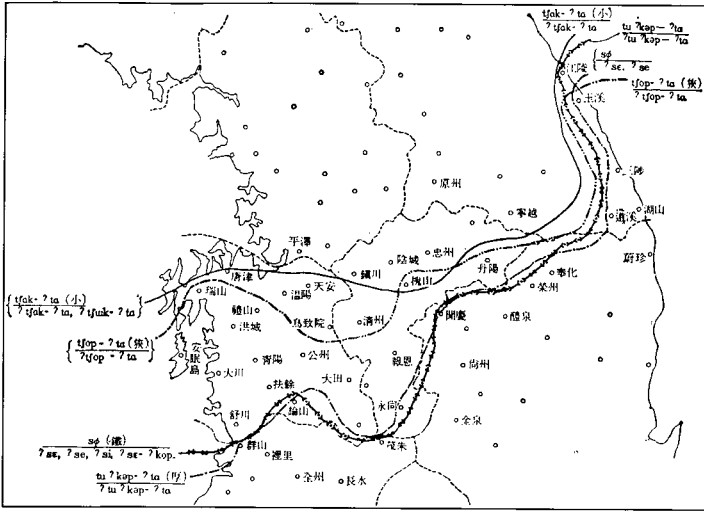


図 11-③ 朝鮮語の南北方言の境界線「語頭子音 濃音化」
 (韓国方言学会 (1973) 『国語方言学』)

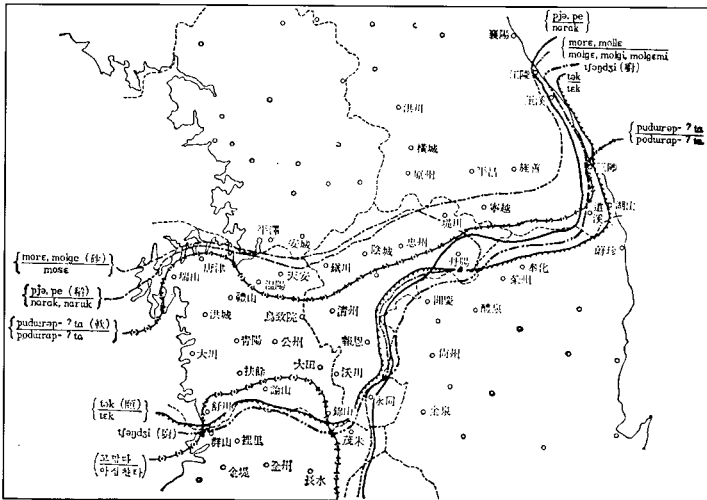


図 11-④ 朝鮮語の南北方言の境界線「語彙」
 (韓国方言学会 (1973) 『国語方言学』)

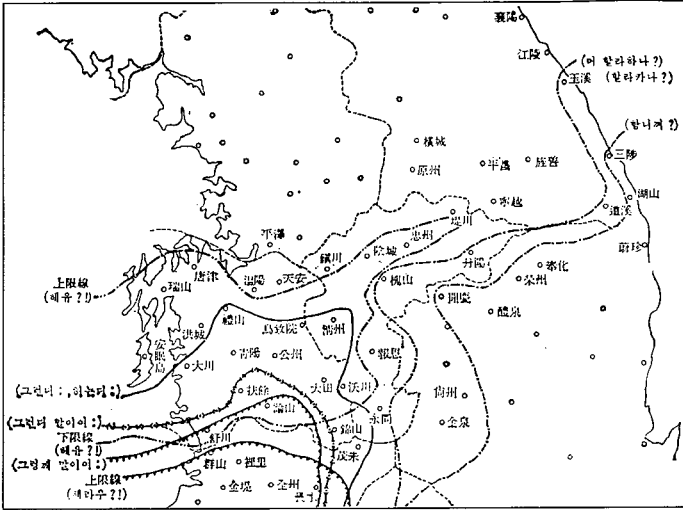


図 11-⑤ 朝鮮語の南北方言の境界線「語法」
 (韓国方言学会 (1973) 『国語方言学』)

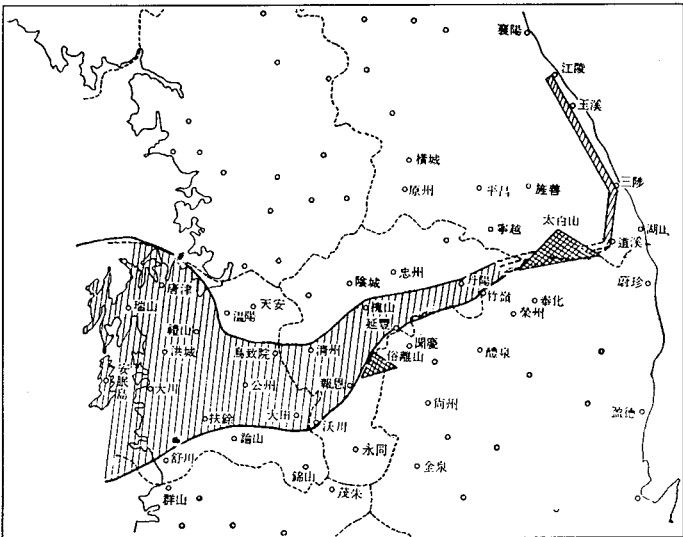


図 11-⑥ 朝鮮語の南北方言群の等語地帯 (境界線統合図)
 (韓国方言学会 (1973) 『国語方言学』)

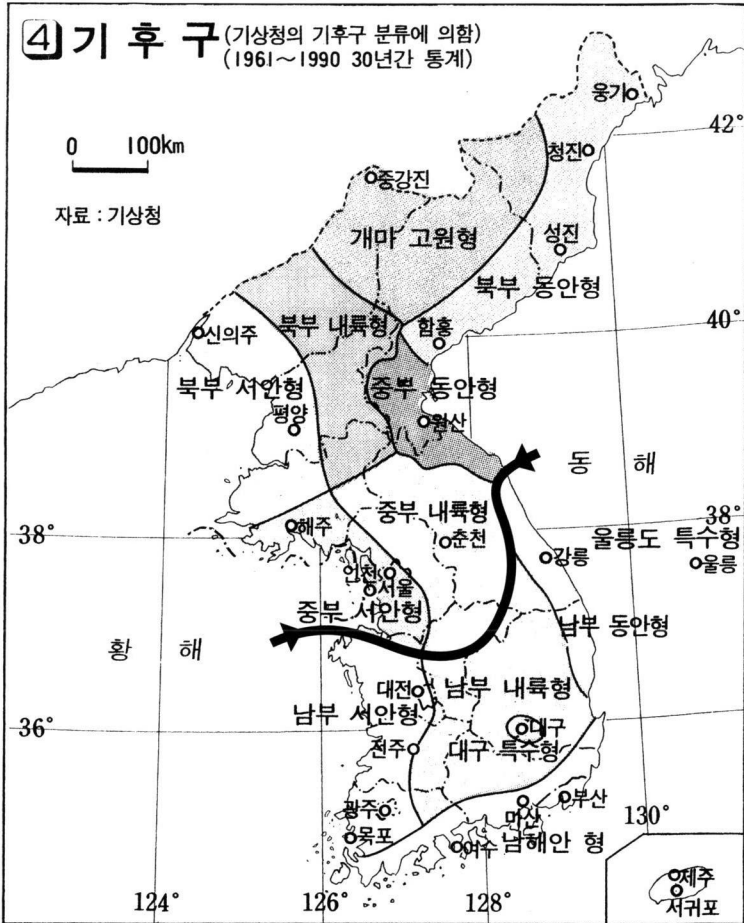


图 12 朝鮮半島における気候区分
 (「気候区」『高等高校地理補導』教文社 1996,
 矢印太線が方言境界線と一致する気候区分線)

(24)

が存在するなら、同じ気候の相違が存在する語族・言語の地域、例えば、インド・ヨーロッパ語族の地域においても、類似する言語境界線・方言境界線が存在している蓋然性が極めて高いと推定された。

次に、地球上の他の地域における類似する方言境界線を探索することが課題となってくる。

6 インド・ヨーロッパ語族における南北（東西）方言境界線

インド・ヨーロッパ語族（IE 語族）は、すでに明らかにされているように、古い段階に、Centum-Satem という二大語派（方言）に分化している。その境界線は、およそ◆図 13 の位置とされている。

◆図 13 「Isoglossa Centum-Satem」 http://indo-european.eu/wiki/index.php/Centum-Satem_isoglos より。（東側（原図で赤地）が Satem，西側（原図で青地）が Centum の領域）

Centum-Satem のその境界線は、ヨーロッパ言語を南北に二分しているところからみて（東西という方が分かりやすいが、起源的には南北と見ておくのがおそらく正しい）、東アジアの南北方言境界線と同様に、その地理的境界の位置に、同様の気候的相違が存在すると推定することができる。

ヨーロッパにおける冬期最寒冷期 1 月の平均気温の等温線を示しているのが、◆図 14 である。果たして、Centum-Satem の境界線と極めて近似する地理的位置に、冬期最寒冷期 1 月の平均気温摂氏 0 度線が併走していることを確認できる（◆図 14-①の 0 度線）。（アルプス付近における 0 度線が多少フランス側に細かなヒダを描いて入り込み複雑になっているが、その部分を挟んだ南北における 0 度線を直線的につないでみると、分布パタンの概略を把握することができよう。◆図 14-②参照）

両者の線、Centum-Satem の言語分類と 0 度線の等温線が大きくずれ

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/a/ae/Centum_Satem_map.png

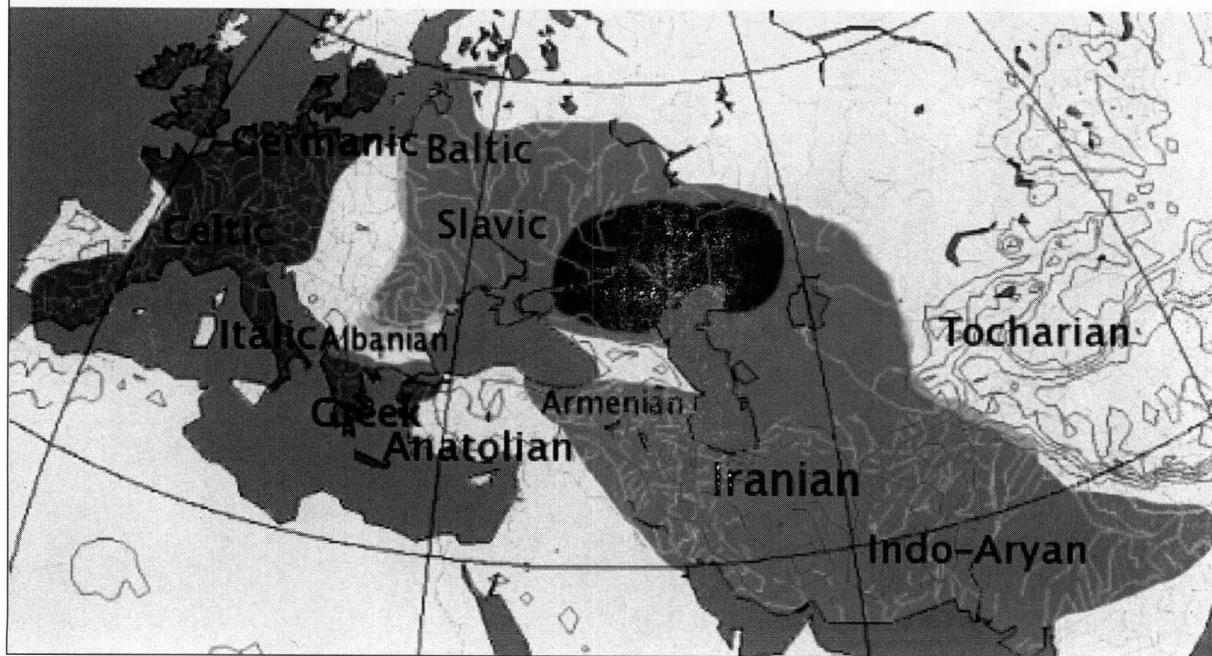


図 13 ケントゥムとサテムの言語境界線

Isoglossa Centum-Satem http://indo-european.eu/wiki/index.php/Centum-Satem_isoglos より

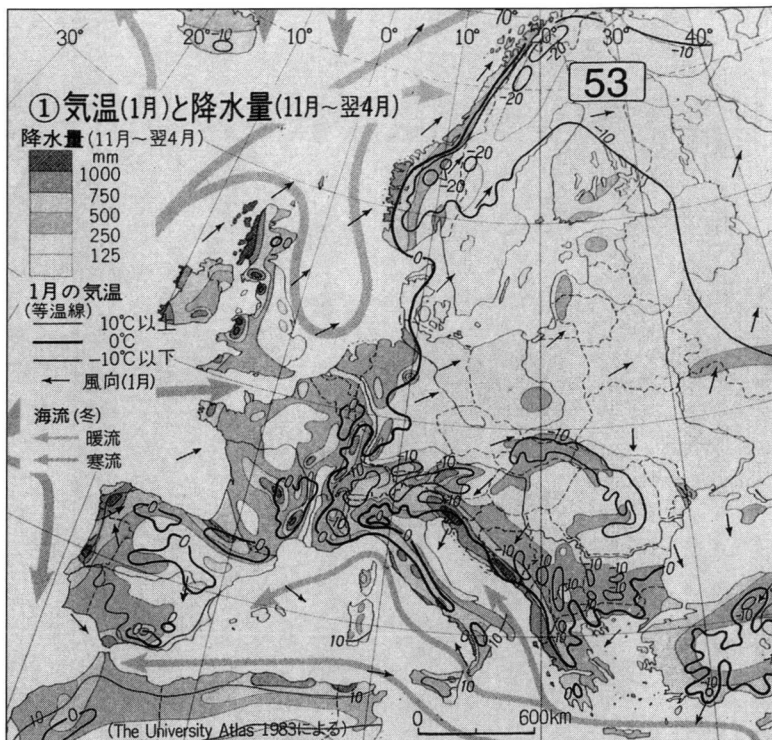


図 14-① ヨーロッパにおける最寒冷期 1 月の平均気温の等温線 0 度線 (二宮書店編集部 (2000) 『新詳現代地図』二宮書店) (アルプス付近における 0 度線が、フランス側に細かなヒダを描いて入り込み多少複雑になっているが、その部分を挟んだ南北における 0 度線を直線的につないでみると、分布パターンの概略を把握することができる。)

るのは、言語史的に、分布地域に関して歴史的経緯をもつスウェーデン語、バルト語派、ルーマニア語のみと言える (◆図 15, 「ヨーロッパの言語分布」参照)。

なお、単なる二大語派の境界というだけでなく、具体的言語現象の相違がある。その相違の 1 つとして、音声現象における「歯擦音」の有無の相違が古くから知られている (◆図 16)。

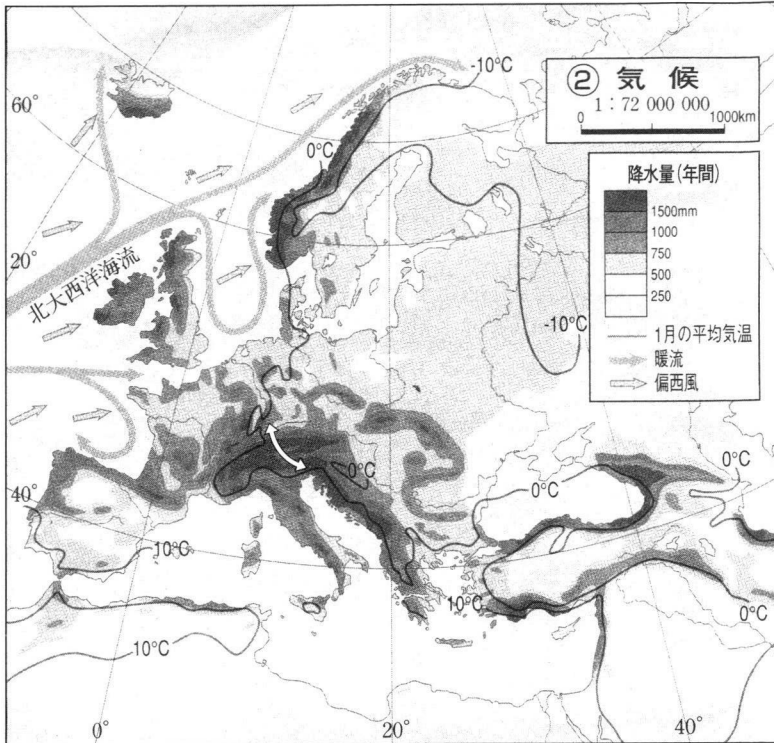


図 14-② ヨーロッパにおける最寒冷期 1 月の平均気温の等温線 0 度線
(帝国書院編集部 (1997) 『新詳高等地図 初訂版』 帝国書院)
(太い補助線はスイス・オーストリアの山岳部をまたいで南北の 0 度線を直線的につないだもの)

◆ 図 16 「ヨーロッパ大陸における歯擦音の地理的分布」 デヴィッド・クリスタル (1992)

Centum 語派の地域には、歴史的に歯擦音が存在してきているが、Satem 語派の地域には過去も含めて歯擦音がまったく存在していない。その分布の境界線は、スウェーデン語からバルト三国付近にかけてを別にすれば、1 月平均気温 0 度線にほぼ併行し、かつ、ヨーロッパ大陸部について言えば、Centum-Satem の境界線とも併行していることを見出すこ

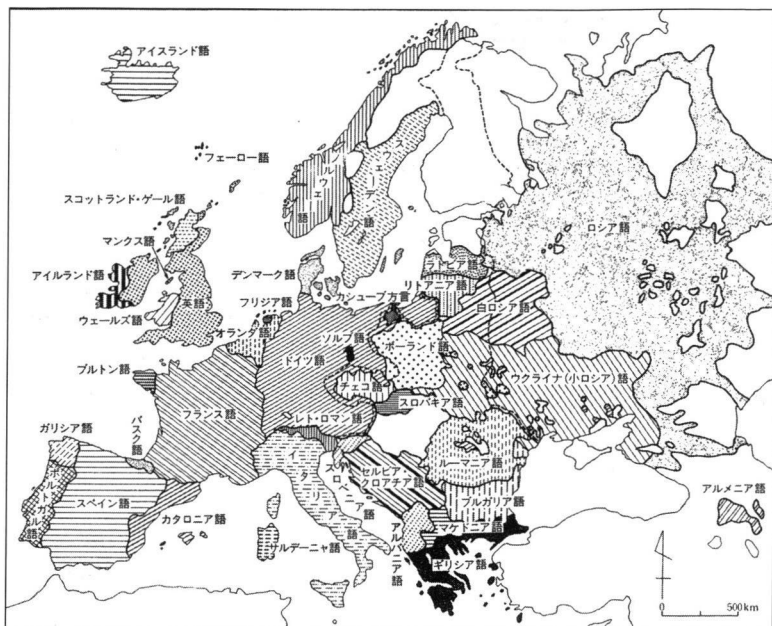


図15 インド・ヨーロッパ語族（言語分布図）（『言語学大辞典』三省堂）

とができる（上記3語を除く）。

さらに、方言と気候のこの境界線が同じ地理的位置にあるなら、この境界線付近（Centum-Satem 境界線および摂氏0度線の近辺）には、東アジアの南北方言境界線の場合と同様に、文化人類学的境界線も確認できるはずである。

その典型的なものとして、1つには遺伝子に関わる事象として、ヨーロッパにおける人類の血液型におけるO型遺伝子の境界線が見出せる（◆図17）。

さらにいま1つには、東アジアにおいてもハツカネズミの種類（遺伝子）の境界線が見られたのと同様に、ヨーロッパ大陸におけるハツカネズミの種の分布境界線を見出すことができた（◆図18）。

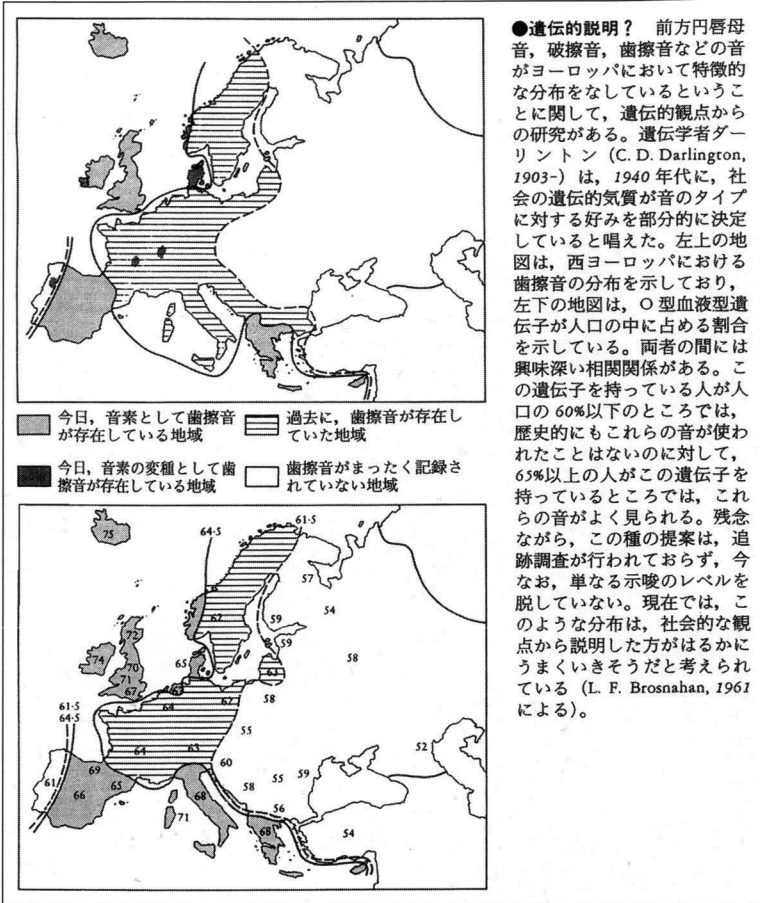


図 16 ヨーロッパ大陸における歯擦音の地理的分布
ディヴィッド・クリスタル (1992) (上)

図 17 ヨーロッパにおけるO型血液型遺伝子の人口に占める割合 (%)
ディヴィッド・クリスタル (1992) (下)

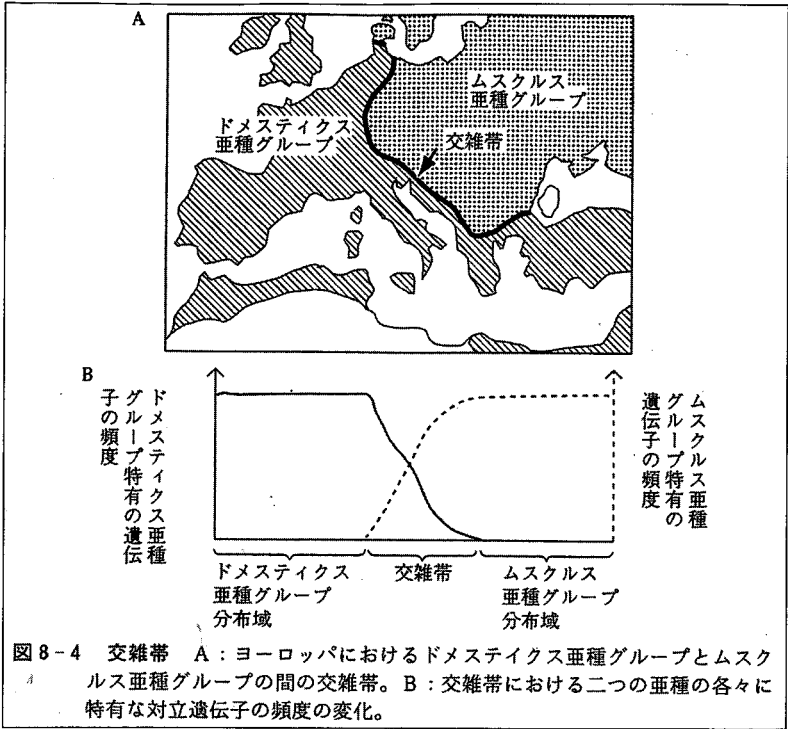


図 18 ヨーロッパにおけるネズミの分布境界線

(「交雑帯 ヨーロッパにおけるドメスティクス亜種グループとムスクルス亜種グループの間の交雑帯」, 森脇和郎 (1999) 「種の遺伝的分化」 森脇和郎・岩槻邦男『生物の進化と多様性』放送大学教育振興会)

◆ 図 17 「ヨーロッパにおける O 型血液型遺伝子が人口に占める割合」
ディヴィッド・クリスタル (1992)

◆ 図 18 「ヨーロッパにおけるネズミの分布」(「交雑帯 ヨーロッパにおけるドメスティクス亜種グループとムスクルス亜種グループの間の交雑帯」)

特に前者の境界線は、IE 語研究史において、IE 語族の他の言語現象の分布境界線と一致することがすでに議論されている現象でもあった。これ

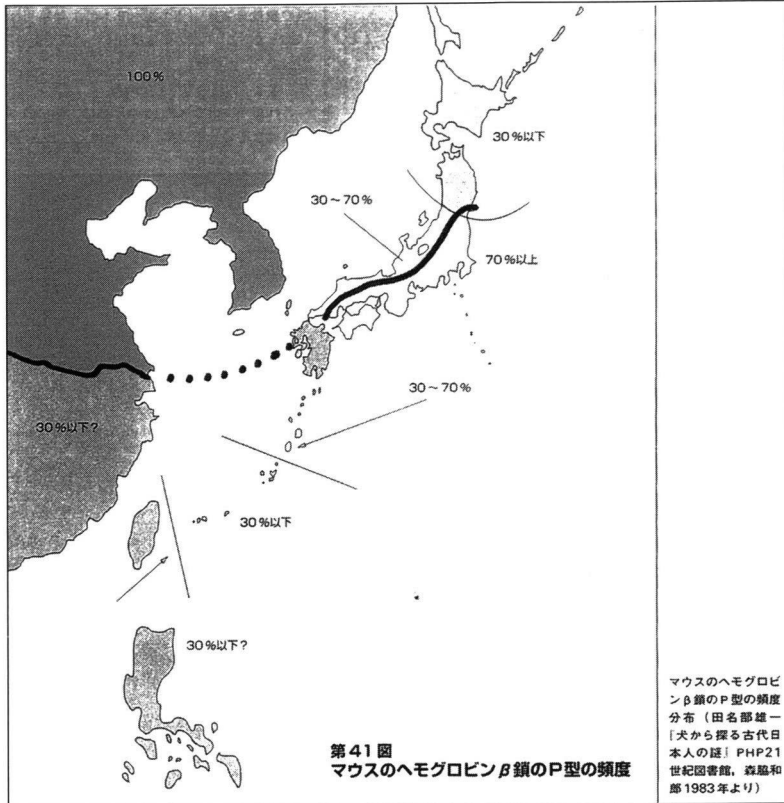


図19 アジアにおける野生マウスの分布
(田名部雄一 (1985)『犬から探る古代日本人の謎』,
『ニュートン別冊』2000年6月より)

らは、民族や言語の起源に関わる地域差というよりも、人や生物の長期的定住地域や移動交流圏という社会的環境論的要因による地域差、と考えておくのが適当と思われる。

ネズミの分布境界線は、中国大陸、日本列島の南北境界線上にも確認できたものであり(安部(1998.3), 安部(2001.11), ◆図19も参照), 興味深い一致である。

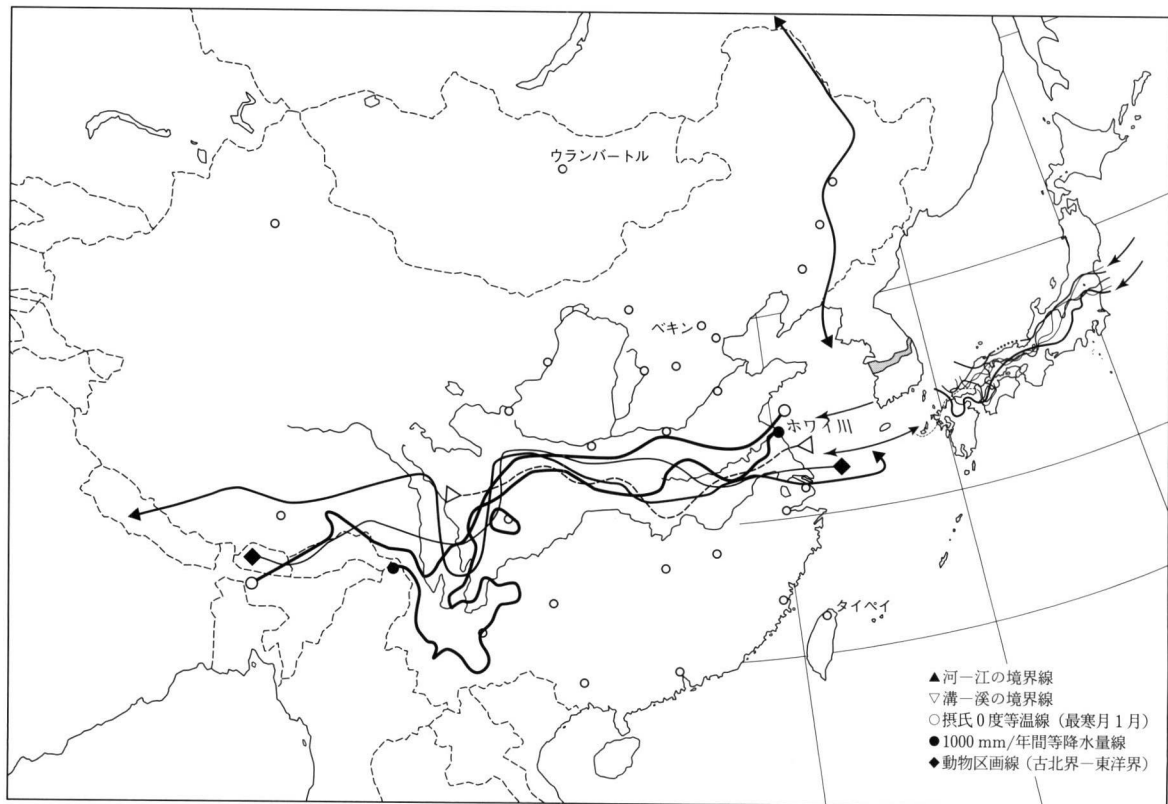


図20 アジアにおける言語・文化・気候の複合境界線（安部）

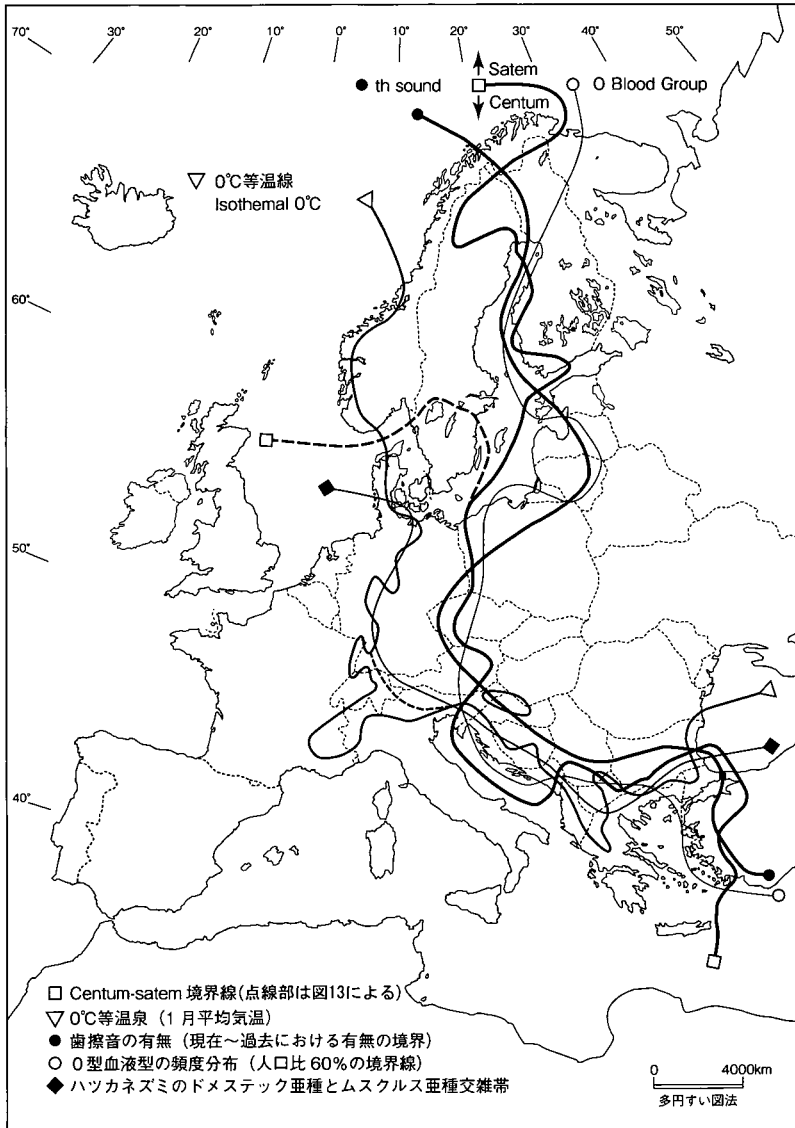


図 21 ヨーロッパにおける言語・文化・気候の複合境界線 (安部)

これらによって、日本語方言における南北方言境界線の形成要因から推定した共通する現象は、中国語、ついで、朝鮮語、ついで、インド・ヨーロッパ語族においても、まったく同様に確認できることが明らかになった。これらの一致は偶然のものではないであろう。

本稿で紹介してきたアジアとヨーロッパにおける言語・文化・気候の境界線を各々統合して示せば、◆図 20、◆図 21 のようになる。

7 日本列島・朝鮮半島・中国大陸の言語・文化境界線を形成した共通要因

上記での一致はけっして偶然のものではなく、東アジアおよびヨーロッパ大陸の言語の方言境界線、気候境界線、文化人類学的境界線が、共通の形成要因、つまり、気候条件の相違による、直接的間接的影響によって生み出されたものである、と考えるのが、現段階では、もっとも妥当性が高いと解釈される。

気候の相違がどのように影響し得るかを、言語、人類、動物、植物、民族・民俗などの広義の文化人類学的現象全般にわたって検討していくことが、今後の課題ということになる。

その1つとして、言語について触れておけば、気候が、どのようなメカニズムをもって、どのような部分の言語特徴の地域差を生み出し得るか否か、という点が今後のおおきな検討課題ということになる。その1つの可能性として、寒冷気候による「寒冷適応」という文化人類学的現象が、「呼気量」の南北の地域差を生み出す要因になり得ること指摘することが可能である（安部（2012.3）参照）。

8 東アジア言語における南北方言の共通言語現象

——音韻対応「k-p (<k^w)」対応——

さらに、上記のような、諸現象の共通性、同一性から推定して、言語の文法・音声・語彙いずれかの個々の現象においても、東アジアの日本語、朝鮮語、中国語の3言語において、南北での同一の相違が現れている蓋然性が高い、と推定されてくる。

調査したところ、実際に、日本語、中国語、朝鮮語の音声現象において、3言語に共通した南北での音韻対応を指摘することができる（安部（2007.10）、安部（2009.3））。

日本語、朝鮮語における「k-p (<k^w)」対応の境界線は、ほぼ南北方言境界線上である。中国における「k-p」対応それ自体の境界線の位置は、現時点では資料的にまだ不十分であるが、河川名における2対の方言境界線から見て、それと同じ地理的位置に、古くは「k-p」対応の音韻境界線があったと推定される。そして、その音韻対応の形成要因の1つの可能性としては、気候の影響があったことということも、理論的に推定されるのである（安部（2012.3））。

9 東アジア言語の音韻対応から見たインド・ヨーロッパ語族との共通言語現象

9-1 東洋の言語研究から西洋の言語現象へのアプローチ

東アジアの3言語において、共通する南北の音韻対応があるなら、同じ現象は、Centum-Satem にも見られるはずである。また、反対に、Centum-Satem に見られる言語現象は、同様に、東アジア言語の南北方言間にも、現れてもおかしくない。

それらのことから考えて、今後は、東アジア3言語の方言と、Centum-

表1 東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）における
「*g・k・x・h—*gw・kw・p・f・φ」の音韻対応

	北方方言(Nortn) *g・k・x・h	南方方言(South) *gw・kw・p・f・φ	意味(meaning)
日本語 JPN	sukka-i kitsu	suppa-i pitsu papi(kw←灰)	酸っぱい(sour) 櫃(bucket made by wood) 灰(ash)
朝鮮語 KRN	xul(hor)	puri(piri)/pul(pir)	村落(village)
中国語 CHN	xwər, xua, huo	fo, fei, pui(v-, b-, m-)	火(fire)
日本漢字音	fi→(漢音 k(kw-)) 絵[huai]→kwai 恵[huai]→kwei 和[hua]→kwa	(呉音 w) 絵 we 恵 we 和 wa	絵 恵 和

Satem との対照研究・比較研究が、世界的言語史研究としても極めて重要な意味を持ってくると考える。

例えば、その1例を、この9章以降に、「日本語における2つのカ行音、2つのサ行音、アメーサメ交替」の問題として提示してみたい。

まず最初に、本章では、東アジア言語から IE 語族へのアプローチを示す。

8章で紹介したように、東アジアの3言語の南北方言には、「k-p 対応」という音韻対応現象が見られる。その音韻対応の形成要因の1つとしては、南北での気候の相違が大きく関与していた可能性が指摘できた（安部 2012: 3）。IE 語族の Centum-Satем が、同じような自然環境を背景にもち、同じ特性をもつ方言境界線であるなら、——そして、そのように解釈してきた推定のプロセスが間違いないものであるなら——、Centum-Satем の間にも、この「k-p 対応」と類似する音韻対応の現象が、存在するはずである。そして、それが、間違いなく存在しているなら、今度は

反対にそのこと自体が、これまで論証・検証してきた一連の解釈の妥当性をも、それは証明してくれるものとなるであろう。

果たせるかな、実際に、Centum-Satem 間の音声現象を調査していくと、類似の現象が指摘できる。

以下では、日本語の方の問題を取り上げる前に、その Centum と Satem との間に確認できた音韻対応における、3種類の k 子音から変遷した 2 系列の k 子音の問題を紹介していくことにする。

9-2 IE 語族における Centum と Satem の音韻対応における 3 種類の k から派生した 2 系列の k

印欧祖語の軟口蓋閉鎖音には調音点により 3 系列が区別されていたと解釈されている。(そのような定説の一例としてこの後 9-3 として、Deborah Anderson, 2004 を掲載しておく)。

無声音 k でいえば、plain *k, labiovelar *kʷ, palatal *[K̟] の 3 系列である ([K̟] は、硬口蓋の k, で、[k̟], あるいは、k の右上に小文字の j を記しても表記される子音 [kʲ] であるが、いま活字の都合上 [*kj] で代用する場合がある)。

この 3 系列は、後のほとんどの印欧諸語において 2 系列へ再編成されていく。その 2 系列への編成には、次のような 2 パターンがあったとされている。

A *kj が *k へ吸収された場合 (centum 系)

B *kʷ が *k へ吸収された場合 (satem 系)

再編成の結果、前者においては、k, g, gh に対して kʷ, gʷ, gʷh が対応し、後者においては、k, g, gh に対して、kʲ, gʲ, gʲh, が対応する、というかたちで区別されたことになった。この 2 系列の相違が、数の「100」を表す祖語の頭子音を変化させて、現在の「100」を意味するところの Centum と Satem という語形の相違となって現れているものである。A

が Centum であり、B が Satem となっている。

例えば、PIE (Prot-Indo-European Language) の *k_j に注目すれば、A の再編成において典型的に k へ吸収されたが、B の再編成において典型的に破擦音 /ts, tʃ/ や摩擦音 /s, ʃ/ へと変化する、という相違を生み出した。また、centum の *k^w は ku, p, b, v, f 等に変化し得た。

このようにして、例えばその 2 大語派 Centum-Satem 語源となっている「100」を表わす祖語、PIE (Proto 印欧語) の *k^mtom によって示せば、インド・ヨーロッパの諸言語においては、centum 系か satem 系かのどちらかへと系統が分かれていくということになったものである。

子音 k を事例として、上記の再編成の流れを示すと、次のようになる。

表 2 PIE から Centum -Satem への「100」の子音変化

PIE	centum	satem
*k ^j	*k	*k ^j
*k		*k
*k ^w	*k ^w	

9-3 Centum と Satem における k 音をめぐる 3 系列の音韻対応表

(Deborah Anderson, 1998 より)

9-2 のことは、IE 語族の研究ではよく知られた現象である。日本の概説書には、ほとんどこの解説がないので、以下に、少し長くはなるが、もう少し詳しい記述 (抄録) を 1 つ紹介しておくことは意味があるであろう。

<http://popgen.well.ox.ac.uk/eurasia/htdocs/anderson.html>; © 1998 by Deborah Anderson

Deborah Anderson, 1998, Centum and satem Languages, Department of Linguistics, University of California, Berkeley

The original form of the word for 'hundred' in Proto-Indo-European was *(d) kmtom [k with an acute above it or k' can be used; dot under m; acute on o], which shows that the centum group has actually retained the original sound of the velar but the satem group has changed the sound; it moved the articulation forward in the mouth.

The *satem/centum* grouping holds fairly well for the outcomes of other dorsals (that is, all kinds of k-sounds) in Indo-European. The example above demonstrates the outcome for PIE *k' [k with an acute above it or k' can be used]. By looking at various correspondences, a table can be created showing the various outcomes in the different languages (adapted from Beekes 1995: 110). The reconstructed Proto-Indo-European form is on the left, the outcomes which appear in cognate words to the right. (The variant outcomes listed below depend largely upon preceding or following sounds or position in a word, particularly initial position. For details on the particular environments, compare Beekes).

A second series has been postulated, the plain velars. However, no IE language clearly retains all three series. (There is some debate about whether Albanian retains all three.) As reflected in the chart below, satem has either a velar or sibilant, centum has either a velar (or palato-velar) or labiovelar. The plain velars occur only in certain environments, i.e., only after *u and *s and before *r and *a, so they appear to be conditioned variants of the other series.

Series One: Velars/Palato-velars

	SATEM					
PIE	Skt	Av	OCS	Lith	Arm	
*k'	s!	s	s	s/	s	
*g'	j	z	z	z/	c	↔
*g'h	h	z	z	z/	j, z	

Series Two: Plain Velars

	SATEM					
PIE	Skt	Av	OCS	Lith	Arm	
*k	outcomes as below					↔
*g						
*gh						
	(labiovelars)					

Series Three: Labiovelars

	SATEM					
PIE	Skt	Av	OCS	Lith	Arm	
*kw}	k, c	k, c	k, c/, c	k	k'	
*gw}	g, j	g, j	g, z/, dz	g	k	↔
*gwh}	h	gh, h	g, j	g, z/, dz	g	

['Acute on previous letter; / is hacek on previous letter; } superscript previous letter.]

A third series is well attested, the labiovelars, which combine the velar with a labial element (represented by the superscripted w). Note that in the satem languages, the labial element is lost. Once again, the satem languages differ from the reconstructed Proto-Indo-European forms in having lost the labializing element.

CENTUM					
Toch.	Hitt.	Greek	Latin	OIr	Gothic
k, s/	k	k	c	c	h, g
k, s/	k	g	g	g	k
k, s/	k	kh	h, g	g	g

CENTUM					
Toch.	Hitt.	Greek	Latin	OIr	Gothic
outcomes as above					
(velars/palato-velars)					

CENTUM					
Toch.	Hitt.	Greek	Latin	OIr	Gothic
k, s/	ku	b, d, g	gu, g, v	b	q
k, s/	ku	p, t, k	qu, c	c	hw
g, j/	k, s/	ku	ph, th, kh	gu, g, v, f-	g, gw, w

* Benjamin W. Fortson IV, *Indo-European Language and Culture: An Introduction*.
Malden, MA: Blackwell, 2004.

10 東アジア言語とインド・ヨーロッパ語族における共通言語現象

10-1 Centum-Satem の音韻対応からみた日本語の 2 つのサ行音と

2 つのカ行音の可能性

Centum-Satem における 2 つのカ行音——簡略に言えば、1 つには p (b) と交替し得るカ行音、1 つには s 音と交替し得るカ行音——が、東アジア言語にも現れ得た（得る）可能性がある。日本語について言えば、1 つは、k-p 対応をなすカ行音である。いま 1 つは、k-s 対応をなすカ行音ということになる。既に紙幅がないので、この問題点を今後の課題として簡略に記しておくことにする。

まず、前者に関しては、安部（2007. 10）他で既に取り上げてきた「k-p 対応」が該当すると考えられる。

後者に関わる現象としては、「アメーサメ交替（雨）」と言われていまだ定説がないなぞの「s」を指摘しておきたい。この「s」音の正体が、この k-s 対応における s である可能性がある。それは、例えば、極めて [h] に近い [k^h] として説明可能な [k^h] があり、それが s との交替形として現れたものであると説明されることになる。その音変化は口蓋化として次のように説明可能である。

$$k^h(=k') > k^j > k^{hj} > k^{tsj} > ts^j > s^j > s$$

この比較研究は、アメーサメ交替の正体として、[*k^hame - same] という新たな仮説を提示する。なぜなら、従来の説では、s 音の挿入ないし脱落の 2 案でしか検討されてきていないからである。

一方の前者のカ行は、安部（2007. 10）や安部（2009. 3）で検討してきたように、p と交替することから見て、理論的には語源的音価は、[*kw] と推定されるものである。その点から見ても、カ行には、次の 2 種類があったことになる。（方言の kw 音の分布にもその痕跡があると解釈可能であるが、その点は機会を改めて述べる。）

この問題は、さらに日本語史上におけるサ行音の音価をめぐり、論が分かれている2種類の子音の問題にも示唆を与える。日本語の古代サ行子音については、従来概略 [sh] 説と [s] 説とがあって定説を見ない(母音の段によって子音が異なるという解釈もされる)。「j (sh)」説が優位のようなようでもある。

Centum-Satem において「k^h」と交替して現れるサ行音は、[s] とされる。もし、日本語にも2種類のサ行音が存在したとするならば、日本語史におけるサ行音研究で議論されていた s と j の2種類の実体は、サ行音は1種類という先入観のために、この2種類を弁別し得ずにいたのではないか。そして、実際には、このカ行と交替するサ行子音 s と、そうではない従来議論されてきたサ行音との2種類に弁別できるものだったということはないであろうか。

東アジアにおける他の言語史研究(例えば朝鮮語)において、すでに「k-s 対応」の現象が議論されているのを見るとき(機会を改めて取り上げたい)、IE 語族とのこのような比較対照研究は、東アジア言語史研究および日本語史研究への、新たな研究の道をわれわれに提示するものと言えよう。

○アメーサメ(雨) 交替=[*k^hame - same]

○2つのカ行子音 第1類 [*k^w] 第2類 [*k^h~*k']

○2つのサ行子音 第1類 [j] 第2類 [s]

それぞれの日本語史としての問題は機会を改めてさらに詳述してみたい。

11 結びとして——東洋と西洋での言語族の形成の相違——

本稿では、東アジアの南北方言境界線と気候境界線と文化人類学的諸特徴の境界線が、日本語、朝鮮語、中国語で一致していることを示しつつ、同じ現象が、ヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語族にも見られること

を、世界で初めて指摘した。

これらの一致を示すことによって、東アジアの言語・文化とヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語族およびヨーロッパ文化の比較言語・文化論的研究の必要性を主張するものでもある。

さらにわれわれは、言語・語派・方言のこのような境界線が、音韻・語彙に現れている以上、文法においても、その境界線での何らかの相違が形作られているはずであろうことを、理論的に予想する。◆図 22 は、その文法事象の世界的分布図の 1 つ、語順 (S, V, O) の分布図であるが、ヨーロッパの境界線 (の 1 つ) は、◆図 21 で示した複合境界線の地理的位置とほとんど一致しているのを確認できる。一方、中国語でも、本稿で提示した境界線をはさんだ南北での漸次的相違を、そこに確認することができる。

アジアの中国語がそうであるなら、アジアの半島部と列島部の言語である朝鮮語と日本語とが、どうして、これらの世界的現象から、歴史的に完全に置き去りにされて、まったく南北での差を包含し得ない別物であり得るはずがあろうか。すでに、日本語の文法現象においても (興味深いことにアクセントでも)、南北境界線上にて、異なる現象が指摘できている (安部 (2008. 3), 安部 (2013))。

さて、この巨視的視点に立つに至ってわれわれは、これらの共通点とは反対に、この南北言語境界線を挟んだ洋の東西諸言語の歴史的成立における彼我のきわめて興味深い相違点に、考察が至り着くことを知る。

すなわち、インド・ヨーロッパ語族の諸言語は、基本的に、東端のトカラ語も含め、1 言語毎が、Centum か Satem かに分類されているように、基本的にこの境界線のどちら側かの言語的特性を担って歴史的に成り立ち、今日に至っている。「Centum と Satem とが混成して形成された混成言語」と分類されているような言語は、(現時点では) 定義されていない。地理的にも、ほぼどちらかの側の領域に位置している。

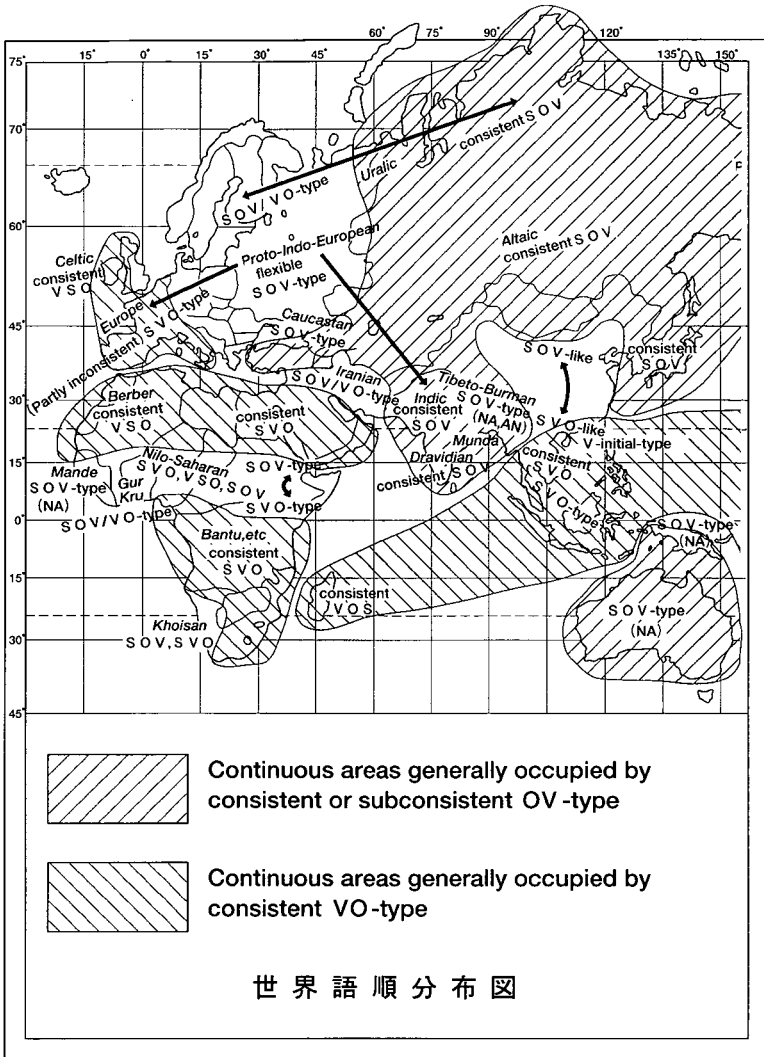


図 22 世界語順分布図 (山本秀樹 (2003) より西側部分)

ところがそれに対して、一方の東洋側の中国語・日本語・朝鮮語 3 言語の「現在の位置」は、地理的にも当該の南北境界線をほぼ中央に抱きかかえるような領域にあって、南北に広くまたがっている。そして、地理的にだけでなく、それらの歴史的形成においても、中国語・日本語・朝鮮語の成り立ちの歴史を知っているものであるならすぐにわかるように、この 3 言語はいずれも、その南北の「言語・方言」相互の混成・混淆の歴史を経て、成立している「南北方言混成言語」であることは明らかである。「比喩的に言えば、これらアジアの 3 言語は、Centum 側の言語であるとか、Satem 側の言語であるという分類はできず、Centum-Satem の混成によって成り立っているという歴史を負っている」のである（詳述は機会を改める）。

このような、西洋と東洋とでの言語形成の歴史の相違と系統論的分類とを照らし合わせた時、日本語・朝鮮語の系統論を（中国語の問題も含め）、インド・ヨーロッパ語族の比較言語学的理論のみと対照させて、論じることには、もはや限界があることが、明らかであろう。今後は、アジアにおけるこの境界線の南北での基層方言（基層言語）の問題、謂わば“アジアの Centum-Satem”の問題を、視野に入れて、日本語・朝鮮語の系統と形成史を考えていく必要がある。まずは、アジアの Centum である南方基層方言と、Satem である北方基層方言の再構成と、それらでの比較言語学的研究を早急に開始する必要がある。これらが、本稿が提示しておくもう 1 つの言語史的課題である。

このように、これら東西 2 地域の言語の比較研究は、新たな研究の可能性を拓くものである。本稿での指摘は、ひとり言語学の問題ではなく、文化人類学的研究課題でもある。その契機となった日本語方言の歴史的地理言語学的研究は、世界的言語史研究に貢献できる視点を持っている。

【付記】

本稿は、学習院大学・人文科学研究所の共同研究プロジェクト（2005・2006年度）「日本語方言における「呼気」の測定と地域差に関する記述的研究」（代表・安部清哉）及び2011年度海外研修期間中の研究成果を含む。関係各位に改めて深謝申し上げる。（当該研究PJでは、呼気の測定が可能であること、その地域差があること、かつ、言語史的に東アジアでの呼気変化が気候の影響で生じる可能性があることなどを、考究した。ヨーロッパにおいても、アジアと同様に、気候上の対照的顕著な寒暖差があれば、同様に呼気に関わり得る音韻対応が、同様のかたちで見出せる蓋然性が高い、という結論を導く上で重要な調査となったものである。）

【参考文献】

- Benjamin W. Fortson IV, *Indo-European Language and Culture: An Introduction*. Malden, MA: Blackwell, 2004.
- 安部清哉（1997.8）「もう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” ——『外日本＝中日本対立分布』＝地図集』『玉藻』33
- 安部清哉（1998.3）「日本列島上の歴史と文化におけるもう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” ——『広日本－中日本対立分布』＝地図集（人類学・考古学・民俗学篇）』『フェリス女学院大学文学部紀要』33
- 安部清哉（1998.3）「日本語におけるもう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” ——『広日本－中日本対立分布』＝地図集（言語篇2）——』『立正大学国語国文』36
- 安部清哉（1998.8）「日本列島上の歴史と文化における分布境界線 “関東・越後線群” ——人類学・考古学・民俗学・気候学篇＝地図集Ⅱ——』『玉藻』34（フェリス女学院大学国文学会）
- 安部清哉（1999.5）「東西方言の諸相と日本語史の課題』『日本語学』18-5
- 安部清哉（1999.9）「古代日本語における古い語彙・音韻と新しい語彙・音韻の言語類型論的比較研究の可能性」佐藤武義編『語彙語法の新研究』明治書院
- 安部清哉（1999.9）「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”』『玉藻』（たまも）35
- 安部清哉（2000.1）「方言分布と日本語史』『国文学 解釈と鑑賞』65-1 至文堂
- 安部清哉（2000.3）「既発表拙論の補足説明と誤植訂正（「秋田方言研究の

- ための語彙表台帳」に付載)『フェリス女学院大学文学部紀要』35
- 安部清哉 (2001. 8)「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本學會 KAJA 第 63 回學術大會 Proceedings』
- 安部清哉 (2001. 11)「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」『玉藻』37
- 安部清哉 (2002. 5)「方言地理学から見た日本語の成立——第 3 の言語史モデル理論としての“Stratification Model”——」『方言地理学の課題』明治書院
- 安部清哉 (2002. 11. 10)「日本語の河川地形名の重層とその背景としてのモンスーン・アジア言語の方言境界線」『国語学会 (2002 年度秋季大会予稿集)』pp. 173-180
- 安部清哉編 (2003. 3)『日本語の方言分布境界線 (関越線・気候線) による方言の重層性に関する基礎的研究』平成 13・14 年度科学研究費成果報告書, 私家版
- 安部清哉 (2003. 7)「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」『国語学』54-3
- 安部清哉 (2004. 7)「地名と日本語——河川地形名の言語空間」『国文学解釈と鑑賞』69-7
- 安部清哉 (2005. 5)「日本語・朝鮮語の境界とモンスーン・アジア文化圏——水源地形名 numa<*nub (沼・泥) の「b-m」音韻対応——」大韓日語日文学会『日語日文学』26 号
- 安部清哉 (2006. 3)「アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏 0 度線)——言語地理学と文化地理学から——」『学習院大学文学部研究年報』52
- 安部清哉 (2006. 10. 14.)「中国語・日本語・朝鮮語に共通する「東アジア南北方言と「気候境界線」(秦嶺山脈—淮河線)」『東アジア日本学研究国際シンポジウム予稿集』中国日語教学研究会・洛陽外国語学院日本語学研究センター共催 (洛陽外国語学院日本学研究センター成立 20 周年記念, 2007. 10. 13-15.) 要旨 pp. 8-10, 【汉语・日语・朝鮮語所共通的“东亚南北方言”和“气候境界线”(秦岭山脉—淮河线)】, 於・洛陽新友誼大酒店
- 安部清哉 (2007. 3a)『言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究 (平成 15-17 年度科研費 (基盤研究 (C) 成果報告書)』, pp. 210., 私家版
- 安部清哉 (2007. 3d)「日本語方言における『呼気』の測定と地域差に関する記述的研究 (共同研究プロジェクト概要)」, 学習院大学人文科学研究

- 所『学習院大学人文科学研究所報 2006 年度版』pp. 27-36
- 安部清哉 (2007. 10) 「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k・x-p)」王鉄橋・姚灯鎮主編『国際化視野中的日本学研究——紀念胡振平教授從教授 45 周年 (東亜日本学国際検討会論文集)』(洛陽・東アジア日本学国際シンポジウム論文集) pp. 31-39., 天津・南開大学出版社
- 安部清哉 (2008. 3) 「アジアの中の日本語」『方言の形成 (シリーズ方言学 1)』pp. 123-167, 岩波書店
- 安部清哉 (2009. 3) 『『きつ (にはめなで)』(『伊勢物語』十四段) の日本語方言及びアジア言語の中の位置』『国文学言語と文芸』125, pp. 37-58, おうふう社
- 安部清哉 (2012. 3) 「東アジア言語 (日本語・中国語・朝鮮語) の南北方言の音韻対応から推定された紀元前 1 万年前の『呼気量変化』(口腔鼻腔流出量比率変化) とその要因について」学習院大学人文科学研究所『人文』10, pp. 7-39
- 安部清哉 (2013. 2) 「日本語方言における『南北方言分布』(語彙音韻文法) の特徴」『玉藻 (宮坂覺学長御退任記念号)』47
- 韓国方言学会 (1973) 『国語方言学』
- 鈴木秀夫 (1966) 「日本の気候と気候区」, 石田竜次郎編『現代地理学体系 第三部世界地理第二巻 日本』古今書院
- 鈴木秀夫・山本武夫 (1978) 『気候と文明・気候と歴史 (気候と人間シリーズ 4)』朝倉書店
- 鈴木秀夫 (1990) 『気候の変化が言葉を変えた』NHK ブックス
- 田名部雄一 (1985) 『犬から探る古代日本人の謎』PHP 研究所
- 中国地図出版社編制出版 (1984) 『中国自然地理図集』(1998 第 2 版より), 中国地図出版社編制出版 (「中国動物地理区画」と「中国第四紀動物区系演変示意図」を引用)
- 陳正祥 (1980) 『中国地理図集』香港・天地圖書有限公司
- ディヴィッド・クリスタル (1992) 『言語百科大事典』大修館書店
- 橋本萬太郎 (1981) 『現代博言学』大修館書店
- 森脇和郎 (1993) 『日本文化の起源』講談社
- 森脇和郎 (1999) 「種の遺伝的分化」森脇和郎・岩槻邦男『生物の進化と多様性』放送大学教育振興会

参照 URL

○図 11 「Isoglossa Centum-Satem」

http://indo-european.eu/wiki/index.php/Centum-Satem_isogloss

(50)

○「秦嶺—淮河—(境界) 線」 WIKIPEDIA

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%A6%E5%B6%BA%E3%83%BB%E6%B7%AE%E6%B2%B3%E7%B7%9A>

○Benjamin W. Fortson IV, Indo-European Language and Culture: An Introduction. Malden, MA: Blackwell, 2004.

○<http://popgen.well.ox.ac.uk/eurasia/htdocs/anderson.html>; ©1998 by Deborah Anderson